一。その學生時代は伯林に過ごされたもので、一八五四年伯林大學の哲學科へ入り神學哲學等を修めた後、言語學特に東方語の研究に從事した。前世紀に於ける獨逸の言語學界の大立物たるフランツ・ボップ、シュタインタール、アウグスト・ポット等の諸氏から一般言語學の講義を聞き、東方語としてはショット氏から蒙古・滿洲・韃靼・支那語等の教を受けたが、この外に猶太・亞剌比亞・波斯・阿斯曼語等をも修めた。かのヤクート語の研究家として知られて居るベトリング氏とは、此の時代に同學として相識の間になつたのだといふ。

二。その中露領亞細亞及びこれに接した地方に居る東方民族の言語及び生活狀態を調べる爲に、露西亞語研究を思ひ立ち、之が動機となつて露西亞に興味を有することになり、一八五八年五月エナで學位を受けると、その夏露都波得堡に旅行した。此の際ショット氏の紹介狀に由つて、露都の學者や政治家から欵待されたが、トルコ學者としての氏の運命はこゝに定められることになつた。それは露西亞の駐獨大使メイエンドルフ伯爵が、氏を西伯利亞バルナウルの高等學校の獨逸語拉典語の教師に推薦したからで、別に夏期には旅費を給してアルタイ地方を旅行させるといふ約束も附いて居たのである。氏が此の依囑に應じた結果は、遂に一八五九年以後一八七一年迄の殆んど十二年間をバルナウルに送る事になつた。此の間夏期の休暇は旅行に過し、冬は業務の餘暇旅行に蒐集した材料を整頓し、最も新らしい資料について研究を進めて行つた、實に此の十二年間に於ける旅行は、アルタイ地方、サヤンスク山脈地方をはじめ、カザック・キルギスの曠野、伊犂の谷間、アバカン、西部西伯利亞セミレチー等各地方の部族の間に及び、蒐集した資料の種類は、從來よくも知れなかつた、もしくは全く不明であつた言語文學から、考古學地理學統計學經濟學等の方面に迄も及んで居る、さうして其の精勵は到底常人の及ばない所で、晝はもとよ